

戊子十月日展審査會席上賦呈驥山兄

淡妝濃抹競誇工。衒異追新古意空。正脈欽君椽  
大筆。逍遙二字壓場雄。

淡汝濃抹競つて工を誇る。異を衒(てら)い新を追いて古意空し。正脈欽ず君が椽大の筆。逍遙の二字場を壓して雄なり。(東韻、工、空、雄)。

今から五十数年前、長崎から七里、西に突出した野母崎という一寒村の海蔵寺という真宗寺に青年驥山先生が現れて字の講釈をされた。先生当時三十になるやならず、私十になるやならず、その時書いて貰った蘭亭の節臨半折。その書風が、現今の行書と余り変わらない。数年前その節臨は老驥山先生の御希望で近作と取り替えて貰ったから篠の井に保存されてあると思われる。それは余談。併し先生は終始古意を尊ばれるという証左にはなる。その近作に添えて賜わった詩を、この場所を借りて披露させて戴く。

「一樟扁舟水接天。青山蘸影白鷗前。前遊緬想奈吾老。負此風光五十年。老驥僮父」。

### 游三崎

城島如眉海上浮。天然屏障護津頭。危檣亂立鷗  
群舞。畫裏風光漁港秋。

城島眉の如く海上に浮ぶ。天然の屏障津頭を護る。危檣亂立、鷗群舞。画裏風光漁港の秋。(尤韻、浮、頭、秋)

飛び交うに鷗は鳴かぬか曇れるに雨は降らぬかここ城ヶ島 野方旧作

舟過奇石怪巖間。波浪直連南米山。回櫂欲探覘  
魚窟。一篷嵐翠入油灣。

舟は過ぐ奇石怪巖の間。波浪直ちに連る南米の山。回櫂探らんと欲す覘魚の窟。一篷の嵐翠油灣に入る。(刪韻、間、山、灣)

おのかじし泳ぎて居ればしこ魚のおこぜといへど美しきもの(油壺水族館 野方旧作)

### 平山光稜苑詩會席上分韻得支

聞説雲林援筆時。山靈水伯暗扶之。光稜秋色誰  
描出。宛は無聲一幅詩。

聞くならく雲林筆を援る時、山靈水伯暗に之を扶(たす)くと。光稜の秋色誰か描き出だす。宛(さ)なが(ら)是れ無聲一幅の詩。(支韻、時、之、詩)

くじびきに依つて支韻に当り、芳翠先生作詩の時、倪雲林来つて暗に之を扶けしかと思われる程当意即妙。

五井鍊心書道曾席上次蛻道人詩韻

把酒揮毫興更加。只慚春蚓又秋蛇。臨池千載多知己。共賞東籬一簇花。

酒を把つて毫を揮えば興更に加わる。只慚(はず)春蚓(しゅんいん)又秋蛇(しゅうだ)。臨池千載知己多し。共に賞す東籬一簇の花。(麻韻、加、蛇、花)

酒、書、詩、世は漸次、平静に復しつゝありしが如し。

時事漫吟

唐李青蓮晋伯倫。再生相會是前因。酒中豪客今誰在。一指先鉤虎大臣。

唐の李青蓮、晋の伯倫。再生相會す是れ前因。酒中の豪客今誰か在る。一指先づ鉤(こう)す虎大臣。(眞韻、倫、囚、臣)

李白、劉伶にならべて酒徳詩に列せしむべく、先づ第一番に指折りとなつた席大臣。我是誰…。第二暗示、酒和山麓のおとど。

尚、先生は虎大臣を我が党の士として尤も敬愛する一人であることを附記する。

戊子十二月陪驥山兄訪淺子氏于城北嘉壽庵此日恰值陰曆十六夜

北去部門十里餘。古刀江畔訪僊居。老松一夜懸明月。滿地影成龍爪書。

北都門を去る十里余。古刀江畔仙居を訪う。老松一夜明月を懸けて。滿地の影は成す龍爪書。(魚韻、餘、居、書)

前には屋漏痕、錐画沙、今亦(また)松影を龍爪書と見られた。常に書を離れぬ日常である。松の幹を龍鱗といふところからの連想でもあらうか。龍爪は詩人永年愛用筆の銘でもある。

洛北風光野趣新。尊前又列海山珍。就中飽領何

尤美。爾汝忘形情味眞。

洛北の風光野趣新たなり。尊前又列（つらぬ）海山の珍。中んづく飽領、何か尤も美。爾汝忘形情味の昆。（眞鰻、新、珍、眞）

景色もよい、酒も旨い、御馳走も結構だ、が、それにもまして嬉しいのは、何の遠慮もないお互いの真情だと仰しやる。近松も云った、「なんの遠慮もないしよりの、世話しられても恩に着ぬ、ほんのめをとと思ふもの」（近頃河原の達引）まことに、心の合致こそ人の世のエクスタシーである。

璞社餞歲筵席上次迪堂翁詩韻

牢落平生臥艸堂。偶追騷客共瓊觴。群賢咳唾皆珠玉。酣醉漸吾一酒狂。

牢落平生艸堂に臥す。偶ま騷客を追ふて瓊觴を共にす。群賢の咳唾皆珠玉。酣醉漸づ吾れ一酒狂。（陽韻、堂、觴、狂）

桃李園の序を想はする一首である。それは春夜、これは歳送りの冬。

次嶺風君劫餘雜咏韻

回天偉業忽歸空。絶代榮華一夢中。筆硯休言是閑事。墨光煜煜燿無窮。

回天の偉業忽ち空に帰し。絶代の榮華一步の中。筆硯言うなかれ是れ閑事と。墨光煜々として無窮に輝く。（東韻、空、中、窮）

千年の歴史をかながへて見ても、栄枯盛衰賽の河原の如く繰り返えして居ることが解るであらう。これを貫いて無窮に輝いているのは眞の書道。

幼少獻書丞相祠。寒梅雪裡著花時。如今此筆與人老。不涅當年純潔姿。

幼少書を献ず宰相の祠、寒梅雪裡花を著くる時。如今此の筆人とともに老いたれども、涅まず当年の純潔の姿。（支韻、祠、時、姿）

天神様であらう。私も幼い時母につれられて、献書したことがある。その時境内に梅干のたねがやたらに置いてあったことを未だに忘れない。そのおかげであらうか、この位にでも字が書けるのは。

照鏡初驚鬢雪堆。稜稜吟骨對寒梅。流離子弟放浪客。何日相逢俱舉杯。

鏡に照して初めて驚く鬢雪の堆きに。稜々たる吟骨寒梅に対す。流離の子弟放浪の客。何れの日にか相逢うて供に杯を挙げん。(灰韻、堆、梅、杯)

ますかがみそこなるかげにむかひみてみるときにこそしらぬおきなにあふこちする

(躬恒一拾遺集旋翻歌)

こう、急にふけたのも戦禍のためであらうか。当時、まことに音信不通、幾萬の子弟。この嘆を発せられたこと御尤である。私も二十年前添削を受けながら、お目にかかれなかつた嶺風先生に初めて相見え得たのは。樗師院賞受賞祝賀会に於てであった。

## 偶成

卅載臨池我忘吾。筆端風月足清娛。劫餘濁浪沖天處。硯海平安獨守愚。

卅載臨池我れ吾を忘る。筆端の風月清娛足る、劫余濁浪天に沖する處。硯海平安獨り愚を守る。

(虞韻、吾、娛、愚)

書、我、一如、至人の言。

## 次秀峰君荷花莊十首韻

藕莊十詠意縱橫。珠玉綴成珊有聲。吟去吟來香遠近。篇篇難弟又難兄。

藕莊十詠意縱橫。珠玉綴り成して珊として声有り。吟じ去り吟じ来つて香遠近。篇々弟たり難く又兄たり難し。(庚韻、横、聲、兄)

この詩に依つて原韻の作者を想うに、周茂叔が如く、蓮を愛する人なるべし。

馳騁墨場携手來。移山早已上蓮臺。應酬詩篇在筐底。披閱燈前黯淚催。

墨場に馳騁して手を携えて来る。移山早く己に蓮台上る。応酬の詩編筐底に在り。披閱して灯前暗涙催す。(灰韻、來、臺、催)

かたみに残る詩に依つて亡友佐分移山をしのぶ情切なり。

八仙曾酌夕陽前。滿目霜楓紅欲然。今日重來函嶺路。白頭孤嘯古關邊。

八仙曾て酌む夕陽の前。滿目の霜楓紅然えんと欲す。今日重ねて来る函嶺の路。白頭孤り嘯く古関の辺。(先韻、前、然、邊)

後出、函山八仙歌を参照し本作の妙を味わうべきである。

曾到龍田上野航。節過菡萏不留香。誦來玉什意  
頻動。明歲會當尋藕莊。

曾つて龍田に到つて野航に上る。節過ぎて菡萏香を留めず。玉什を誦し来つて意頻りに動く。明歳かならず當に藕莊を尋ぬべし。(陽韻、航、香、莊)

前山、訪淋榭友砂洲君子立田村四首と併せ味誦すべし。

吾訪藕莊君請來。主賓鼎坐共傾杯。一觴一詠荷  
香裡。醉試塗鴉亦快哉。

吾れ藕莊を訪わば君請う來れ。主賓鼎坐共に杯を傾けん。一觴一詠荷香の裡。酔うて塗鴉を試むるも亦快ならずや。(仄韻、來、杯、哉)

この企てが実現されたならば蘭亭記にも比すべき藕莊記が作された筈である。

遠望眉山峙似屏。他時對此擬題銘。硯池朝灑荷  
花露。巨筆揮來字字馨。

遠く眉山を望めば峙つて屏に似たり。他時此れに對して銘を題せんと擬す。硯池あしたに荷花の露を灑いで。巨筆揮い來れば字々馨しからん。(青韻、屏、銘、馨)

千歳流芳の摩崖碑の現出を冀(こいねが)うこと切である。

諸君發興舉杯頻。一醉援毫字自珍。借問酒腸誰  
最大。龍蛇滿壁孰尤伸。

諸君興を發して杯を挙ぐることに頻りなり。一酔毫を援つて字自ら珍。借問す酒腸誰か最も大。龍蛇壁に満ちて孰れか尤も伸ぶ。(眞韻、頻、珍、伸)

温庭筠の詩に「落筆龍蛇滿壞牆」とある。

十里荷田収一庭。眉山翠黛入窓櫺。緬懷清曉尋  
香處。釣客橫舟夢未醒。

十里荷田一庭に収む。眉山の翠黛窓櫺に入る。緬懷す清曉香を尋ぬる処。釣客舟に横たはつて夢未だ醒めず。(青韻、庭、櫺、醒)

花。香遠くして益々清く。

舟。遠く觀るべくして褻翫すべからず。(愛蓮説)

宴罷荷莊鳥語閒。朝開戶牖對眉山。雲烟滿壁欲  
飛動。醉筆何論王與顏。

宴罷んで荷莊鳥語閒なり。朝に戸牖を開いて眉山に對す。雲烟壁に満ちて飛動せんと欲す。醉

筆何ぞ王と顔とを論ぜん。(刪韻、閒、山、顔)

王は王右軍、顔は顔魯公。眉山の摩崖か、荷荘の雲姻か、右軍の龍か、魯公の蛇か、宿醉未だ是を弁ぜず。

主公無惜擲千金。徹道人知雅客心。可羨移山門下士。忘形爾汝友情深。

主公惜しみ無く千金を擲つ。道に徹するの人は知る雅客の心。羨むべし移山門下の士。忘形爾汝友情深し。(侵韻、金、心、深)

墨容を迎える処。名も荷花荘、主人服部沙洲氏と、この原韻荷花荘十首の作者武市秀峰氏は共に移山門下の士。杜少陵の「酔時歌」に「錢を得ては即ち相寛め、酒を沽うて復た疑わず。忘形爾汝に到る。痛飲真に我が師」とある。お前が、おれがというほどの極めて親しい仲をいう。

以上十首総て次韻である。竹雨先生曾て樗詩の次韻作を評して「次韻の痕跡無し」と言われた。

### 戊子歳晩臥病

馳騁江湖翰墨場。閑人事業亦何忙。一朝臥病硯池涸。却得遣懷詩幾章。

馳騁江湖翰墨の場。閑人の事業亦何ぞ忙。一朝病に臥して硯池涸る。却つて得たり遣懷詩幾章。

(陽韻、場、忙、章)

蘇東坡曰く「病に因つて閑を得る殊に悪しからず。」と。

### 己丑元旦恭賦宸題朝雪 昭和二十四年

劫灰慘澹滿都門。懷壁頽墻留彈痕。天壓風塵飛玉屑。玲瓏描出別乾坤。

劫灰慘澹として都門に満つ。壞壁頽墻彈痕を留む。天風塵を壓して玉屑を飛ばし。玲瓏描き出だす別乾坤。(元韻、門、痕、坤)

終戦後四年を経るも猶この惨状、目を掩う手を、しばしでも休めしめんと、天帝の意、詩人の筆。

### 歳朝書懷 次芳雲先生韻

賡酬手寫薛濤箋。翰墨優游別有天。偶賦新詩慚

後輩。例磨古硯學先賢。驪珠誰握文壇上。蝸篆  
吾題書案前。儋石無儲高枕睡。嘯花吟月送殘年。

賡酬手づから写す薛濤箋。翰墨優游別に天有り。偶ま新詩を賦して後輩に慚じ。例に古硯を磨して先賢を学ぶ。驪珠誰か握る文壇の上。蝸篆吾れ題す書案の前。儋石儲無く枕を高うして睡る。嘯花吟月残年を送らん。(先韻、箋、天、賢、前、年)

律詩は対句の故に成作至難とされて居る。而もこの作は次韻である。妙を知るために、頷聯・頸聯を、原型に復して鑑賞に供したい。

偶賦新詩慚後輩 例磨古硯學先賢 (頷聯)

驪珠誰握文壇上 蝸篆吾題書案前 (頸聯)

寫報徳訓誤脱一不字即題一詩付之後生

細寫訓言終脱字。古賢深意恐難通。留將敗紙爲  
殷鑑。精慮無虧九仞功。

竹雨曰。不藏其過。以訓後生。可謂厚于道也。

細かに訓言を写して終りに字を脱す。古賢の深意恐らくは通じ難し。敗紙を留め將つて殷鑑と爲す。精慮虧くなかれ九仞の功。(東韻、通、功)

竹雨先生評して曰く「其の過を蔵さず、以て後生に訓える、道に厚しと謂うべき也。」

偶成

病餘偶拂硯池塵。意筆乖離難暢神。兵馬十年徒  
倥傯。奈何墨海此沈淪。

病余偶ま払う硯池の塵。意筆乖離して神を暢ばし難し。兵馬十年徒らに倥傯。墨海の此の沈淪をいかんせん。(眞韻、塵、神、淪)

僅かの間の病臥にさえ、筆、意の如くならず、況んや十年間の戦争による空白、書道の妨礙はかられずと嘆かれた。

壽野内翁八秩次其自述韻

齡躋八秩事農耕。門有兒孫欣舞迎。知命樂天安

我分。壽康何用學長生。

齡八秩に躋つて農耕を事とす。門に児孫の欣舞して迎える有り。命を知り天を楽んで我が分に安んず。壽康何ぞ用いん長生を学ぶを。(庚韻、耕、迎、生)

樂天、知命、安分、即長生。

聞宮澤秀臣翁齡躋喜壽門生爲翁有筆塚建設之舉詩以賀

育英布教捧生涯。喜壽澄懷親硯池。耕帑如山筆

成塚。宛然當代永禪師。

育英布教生涯を捧ぐ。喜壽懷を澄まして硯池に親しむ。耕帑山の如く筆塚を成す。宛然当代の永禪師。(支韻、涯、池、師)

智永は筆塚の元祖、真草千字文八百本を揮毫して末寺に配ったと言われる。

賀土屋竹雨先生列藝術院會員

蟹行文字橫行日。名列藝園朝上天。搖嶽凌滄千

古業。騷壇齊迎老詩仙。

蟹行の文字橫行の日。名は芸園に列して朝に天に上る。搖嶽凌滄千古の業。騷壇齊しく仰ぐ老詩仙。(先韻、天、仙)

李白の江上吟に「興酣にして筆を落せば五嶽を揺かし、詩成つて笑傲滄洲を凌ぐ」とある、搖嶽凌滄はこれから出ている。米俗欧風跋扈のとき、東洋詩文を以て藝術院會員に列せらる。げに、乾坤をうごかすものは詩文である。

次津金鶴仙君見寄韻

剪取芭蕉代彩箋。風懷補得劫餘天。園林只恐雨

聲絶。蛙子那邊參坐禪。

芭蕉を剪取して彩箋に代う。風懷補い得たり劫余の天。園林只恐る雨声絶え。蛙子那邊にか坐禪に參ず。(先韻、箋、天、禪)

芭蕉の葉に揮毫するのは面白い。が、切り取ったら、雨が降ってもたたいて音さす葉っぱがない。蛙の參禪する場所が無い。

次新井琢齋君華甲自述韻

學篆揮刀六十年。人圓技熟玉熒然。願君壽考如金石。名與荃翁千載傳。

篆を学び刀を揮う六十年。人円かに技熟して熒然たり。願わくは君、壽考金石の如く。名は荃翁と千載に伝えんことを。(先韻、年、然、伝)

琢齋一玉荃然。措辞の懇篤学ぶべし。

結廬

漂泊多年再結家。蕭條却喜少紛譁。三間書屋能容膝。一卷南華一椀茶。

漂泊多年再び家を結ぶ。蕭条却つて喜ぶ紛譁の少なるを。三間の書屋能く膝を容る。一卷の南華一椀の茶。(麻韻、家、譁、茶)

然り而して、膝を容るるを許されし者数を知らず。一卷の南華、万句を生み、一椀の苦茗、千歳の書を成す。

次名越機外君見寄韻

墨海優游逸興同。豈無奔浪激狂風。指南車是先賢筆。温故只當期有終。

竹雨曰。謙恭秉心。不伐其長。綽有古人之風。

墨海優游逸興同じ。豈奔浪の狂風に激する無からんや。指南車は是れ先賢の筆。温故只まさに有終を期すべし。(東韻、同、風、終)

衆生濟度如斯。

樗

焦土自生三丈樗。一庭翠色繞茅廬。世人重利論材質。我愛清陰涼有餘。

焦土自ら生ず三丈の樗。一庭の翠色茅廬を繞る。世人利を重んじて材質を論ず。我は愛す清陰の涼余り有るを。(魚韻、樗、廬、余)

樗盒の縁起である。名が判らないままにぐんぐん伸長する樹を来訪の津金鶴仙氏が、信州に沢山ある「ぬるで」で、莊子に謂う樗櫟の樗であると指摘された。そこで採って庵号とされたという。

### 次流石君述懷韻二首

塵網卅餘年。偷生徒碌碌。羨君詩境閑。萬卷盈胸腹。

塵網卅餘年。生を偷んで徒らに碌碌。羨む君が詩境閑にして。万巻胸腹に盈つるを。(沃韻、碌、腹)

塵網の中に落つること四十余年、羨やましきは君、腹笥に万巻の書を貯えるを。

塗鴉成痼癖。親灸聖賢言。守拙唯娛我。毀譽何足論。

塗鴉痼癖を成す。親灸す聖賢の言。拙を守を守って唯我を娛しむ。毀与何ぞ論ずるに足らん。

(元韻、言、論)

放庵先生曾て曾て曰く、「書道界の毀与褒貶、夥多驚くべし」と。

### 修戰歿社友慰靈祭於奥多摩寒山寺

書海同舟有宿縁。共分硯水幾年年。滄桑今日人何處。一瓣心香一片煙。

竹雨曰。憑弔舊交。黯然神傷。詩亦淚墨交印。不耐卒讀。

書海同舟宿縁有り。共に硯水を分つ幾年々。滄桑今日、人何れの処ぞ。一弁の心香一片の煙。(先韻、縁、年、煙)

竹雨先生評して曰く「旧交を憑弔し、黯然として神傷む。詩も亦、涙墨、交々印す。卒読するに耐えず」と。

### 寄驥山老契

把臂常親君與余。何期劫後久離居。山重水復路千里。一片冰心付雁魚。

臂を把つて常に親しむ君と余と。何ぞ期せん劫後久しく離居するを。山重水復路千里。一片の冰心雁魚に付す。

一首の情を温むること千万言と雖もこれに及ばず。

同看紅葉映溪流。環翠樓頭八酒儔。豪興如今與誰共。函山依舊白雲悠。

同じく見る紅葉の溪流に映ずるを。環翠樓頭の八酒儔。豪興如今誰と共にせん。函山旧に依つて白雲悠たり。(尤韻、流、儔、悠)

紅葉に説き起こし白雲を以て結ぶ。対比の妙。語出、函山八仙歌を参照すべし。

俯聽流水弄潺湲。仰見歸鴉過杪間。山雨沛然來又歇。暮蟬聲裡白雲還。

俯して聴く流水の潺湲を弄するを。仰いで見る帰鴉の杪間を過ぐるを。山雨沛然として来て又歇む。暮蟬声裡白雲還る。(刪韻、湲、間、還)

河声、鴉声、雨声、蟬声を起承転結の各句に配され、自然の交響樂が聞こえる様である。これをこれ天籟という。

把酒對月 璞社詩筵分韻得先

典午風流文字緣。良宵簪筆侍詩筵。興來頻噏杯中月。滿引清光身欲仙。

典午の風流文字の緣。良宵筆を簪して詩筵に侍す。興来つて頻りに噏う杯中の月。清光を滿引して身、仙ならんと欲す。(先韻、緣、筵、仙)

典午は晋のことで即ち蘭亭の風流をさす。

乙丑秋分催書海三百號記念展覽會慰勞小宴于函嶺仙石原

幾旬共騁市塵間。載酒揮筇上碧山。一浴飛觴洗

# 心耳。壺天又得爛柯閒。

幾句か共に騁ず市塵の間。酒を載せ箆を揮うて碧山に上る。一浴觴を飛ばして心耳を洗う。壺天又得たり爛柯の間。(刪韻、間、山、閒)

晋の王質という樵者(きこり)が童子たちの打つ碁に見とれて居る間に、彼の柯(斧の柄)が爛(くさ)れてしまった程の久しい年代が経つて居たという故事から、爛柯を園碁に「フケル」ことに言い。汝南市中の売菓翁が跳り込んだ壺の中に金殿玉楼が有り旨酒甘肴があつて、別天地を為して居り、そこで宴樂したという故事から壺天と云えば、酒を飲む楽しみを意味する。

が、この作の結句の「爛柯」を単に「碁」と解してはならず、又、「壺天」を単に「酒の楽しみ」と見てもなるまい。過去という概念に壓縮されて、一口に三百号と云つてしまふことを『爛柯』という文字に籠め、一号一号に夫れぞれ、切瑳琢磨の内容が盛られであることを「壺天」という文字に籠められた。詩人の感懐として鑑賞すべきである。

## 福島秦雲龍君見贈家園苹果賦此道謝

奥州苹果向人誇。盤上纍纍香更加。記是陽春訪  
龍窟。嫣然迎我滿園花。

奥州の苹果人に向つて誇る。盤上纍々番更に加わる。記す是れ陽春龍窟を訪ねしとき。嫣然我を迎えし満園の花。(麻韻、誇、加、花)  
実も花もある賦。

高村光太郎もリンゴをうたつた。

奥州花巻リンゴの名所

リンゴ数々品ある中に

阿部のたいしょが手しおにかけた

国光紅玉デリシヤス

(醉中吟)

## 暮秋

林頭點破亂飛鴉。隔澗殘雲夕照斜。一路蕭條寺  
門外。何人逢著款冬花。

林頭点破す乱飛の鴉。澗を隔つるの残雪夕照斜めなり。一路蕭條、寺門の外。何人か逢著す款冬花。(麻韻、鴉、斜、花)

款冬とはフキのことである。款冬花と云えばフキの臺と云つて親しまれて居る。款はよろこぶ即ち冬を飲んで花さく義と注せられて居るが、一解では款はタタク、凍氷をたたいて花咲く故に、款凍とも款東とも書く。正月の野方では必ずフキノトウがかたまつた花を日溜りにのぞかせる。この詩では又何と早い款冬の花であらう。まだ秋というのに。

そこで庚子十二月二十四日二葉会最終稽古日に右花期のずれについて、師に乞言したところ三体詩に張籍の「賈島に逢う」と題する七絶「僧房逢著す款冬花、寺を出でて吟行すれば日已に斜なり。十二街中春雪遍し。馬蹄今去つて誰が家にか入らん。」があり、この詩中の款冬花をツワブキのこととして説かれてある故に、劫余詩存「暮秋」中の「款冬花」も亦、「ツワブキ」を詠じたものであることを教えていただいた。ツワブキとは「石路」又は、「橐吾」と漢字が当てられ十月の陽に匂う花。フキと共に菊科に属する。野方では丁度新装の白銀の富士の見ゆる頃相對して黄金色に輝いて咲きほこる。

### 迎奇石君于檮盒席上次見似韻

賣書沽酒酒盈瓶。機巧何論緯與經。一醉圍棋無俗事。子聲隔竹只丁丁。

書を売り酒を沽いて酒瓶に盈つ。機巧何ぞ論ぜん緯と経と。一醉棋を圍んで俗事無し。子声竹を隔てて只丁々。(庚韻、盈、経、丁)

売書沽酒のいきさつか、碁の筋か、からみの手談か、鳥か驚か、丁々発止。

塵世毀譽吾那關。隱居市井亦仙寰。臨池忙了幽齋裡。却是浮生天賦閑。

塵世の毀与吾れ那んぞ関せんや。隱居すれば市井も亦仙寰。臨池忙了す幽齋の裡。却つて是れ浮生天賦の閑。(刪韻、関、寰、閑)

芳翠坐隱。日本棋院有段者と承る。

### 檮盒偶吟

客來談翰墨。客去寫詞章。鎮日蕭齋裡。如閑又似忙。

客来つて翰墨を談じ。客去つて詞章を写す。鎮日蕭齋の裡。閑なるが如く又忙なるに似たり。

(陽韻、章、忙)

雁渡寒潭、雁過而潭不留影(菜根潭)

### 次韻答人

耿耿平生一片心。劫餘世態感殊深。寄言墨海弄

潮子。筆正居然通古今。

耿耿たり平生一片の心。劫余の世態、感殊に深し。言を寄す墨海の弄潮子。筆正居然古今に通ず。(侵韻、心、深、今)

書海の羅針盤として常時重視すべし。

己丑十一月旬一天皇皇后兩陛下幸日本美術展覽會。

小作亦賜天覽。臣辱下問。謹奉答焉。乃賦此。記榮。

我元南海一書狂。咫尺何期拜寵光。偶興塗鴉屏六曲。雙懸日月墨華香。

我は元南海の一書狂。咫尺何ぞ期せん寵光を拝するを。偶興塗鴉、扉六曲。日月を双び懸けて墨華香ばし。(陽韻、狂、光、香)

樗門悉く余光に浴す。天覽作品は「遠望眉山時似屏。他時對此擬題銘。研池朝灑荷花露。巨筆揮來字々馨」の荷花莊雜詠七絶を行書でものされた六曲半双。

偶作

把筆明窓庭。繙書淨几前。於吾多尚友。上下二千年。

把筆明窓の底。繙書淨几の前。吾に於て尚友多し。上下二千年。(先韻、前、年)  
古賢、今英悉く是友。

己丑除夕

老來殊覺歲星巡。宿志蹉跎霜鬢新。一笑明朝齡法改。重迎五十七年春

老來殊に覺ゆ歲星の巡るを。宿志蹉跎として霜鬢簾新なり。一笑す明朝齡法改まり。重ねて迎う五十七年の春。(真韻、巡、新、春)

明年から「数え年」を廢して「満」を採用。

庚寅元旦 昭和二十五年

落魄流離送幾春。蝸廬始得笑迎新。裊氛不到臨池室。退筆猶餘一味真。

落魄流離幾春を送る。蝸廬始めて得たり笑つて新を迎えるを。裊氛到らず臨池の室、退筆猶余す一味の真。(真韻、春、新、真)

玄靈帖中の山鹿素行の詩は、この退筆に依る作かと思われる。

### 宸題若草

春入長堤縁似氈。禽聲牛語帶晴煙。漫移一片路傍石。下有嫫芽無告天。

春は長堤に入つて緑、氈に似たり。禽聲牛語晴煙を帯ぶ。漫に一片踏傍の石を移せば。下に有り嫫芽無告の天。(先韻 氈、煙、天)

嫫芽―嫩芽に同じく、若い芽のこと。

無告―何処へも告訴すべき処のないこと。

春風千里、のどかなうちにもかゝる一面のあることを敕題を假りて諷したのであらう。

### 論書 孫過庭

其言其跡共幽玄。書苑高標譜一篇。偶正衍譌明節勢。臨池千載有奇縁。

竹雨日。墨林嘉績。百載不朽。

其言其跡共に幽玄。書苑高く標す譜一篇。偶々衍譌を正して節勢を明かにす。臨池千載奇縁有り。(先韻 玄、篇、縁)

孫過庭の書譜中に散見する節筆が、料紙の折り目に起因するものであることを発見してその冤を雪ぐと共以後の書譜を学ぶ者に一大警告を与えられた先生。千載の知己とはこれであらう。

### 論書 趙子昂

難將無節沒鷗波。千載炳乎名跡多。祖述山陰傳正脈。研池長養右軍鶩。

節無きをもつて鷗波を没し難し。千載炳乎として名跡多し。山陰を祖述して正脈を伝う。研池長く養ふ右軍の鶩。(麻韻 波、多、鶩)

趙子昂は宋の皇族なるに元に降って仕えたことを節操無しと論ずる者あり。子昂、鷗波亭とも号す。故に鷗波を没し難しとは、節操がないからと云つて子昂の芸術上の功績を無視出来ないと解す。「山陰」とは会稽山陰にして「右軍の鷺」と共に羲之の芸術を指すものと解せられる。

ところで、趙子昂の節操無きを非難した有名な渡辺崋山の詩がある。

「鄭老蘭を画いて土を画かず。為す有る者は必ず為さざる有り。酔来竹を写して蘆葉に似たれども。作らず鷗波無節の枝。」と。鄭所南という宋の遺臣は、宋亡びてから元朝に仕えず、尔来彼は蘭を画く場合、蘭の根を画き添えて、決して土を画かなかつた。これは宋が亡びて一莖の草すら植えるべき土地がないというレヂスタンスである。崋山は、これを有為の人には亦必ず為さないこと即ち無為があるとたたえた。崋山も画家であるから酔余に竹を画いたが、蘆の葉にも似た下手な竹ではあるが、趙子昂の様に節のない枝は書かないぞ、己にも無為があるぞという感慨を詠んだものである。国情、時代、立場の相違で、詩は万華、万葉である。

## 論書 文徵明

康壽誰能得似公。 蠅頭細字老逾工。 筆精詩妙宗明代。 三絶衡山九十翁。

竹雨曰。意主中正。語貴確切。品隲二家。能揚其美。非阿好之言也。

康壽誰か能く公に似るを得ん。蠅頭の細字老いていよいよ工。筆精詩妙明代に宗たり。三絶衡山九十翁。(東韻公、工、翁)

文徵明、衡山居士と号す。年九十、よく蠅頭の細字を書す。詩、書、画の三絶。

## 題自畫瓢二首

臨書倦拘束。 洗筆畫瓠觴。 戲墨寧依樣。 胡蘆一笑長。

書を臨して拘束に倦み。筆を洗つて瓠觴を画く。戲墨寧ぞ様に依らん。胡蘆一笑長し。(陽韻 觴、長)

瓠はフクベで胡蘆とも書く。觴はサカヅキ。様に依つて胡蘆を画くとは、新味のないことを云い、同音で胡蘆とは大笑することを云う。

瓢兮吾與汝。 涉世幾浮沈。 醉裡乾坤在。 同論夙昔心。

竹雨曰。造句奇逸。想見其畫亦不凡。

瓢や吾れ汝と。世を涉つて幾浮沈。酔裡乾坤在り。同に論ず夙昔の心。(侵韻 沈、心)

壺中天あり、瓢中豈に乾坤なからんや。瓢筭ばかりが浮くものか。

竹雨先生評して曰く「造句奇逸、想見す其の画亦凡ならざるを」と。

偶作

一枝秃筆托生涯。汲古探真又索奇。此意如今人不解。殷勤呼我作書師。

一枝の秃筆生涯を托す。古を汲み、真を探り又奇を索む。此の意如今人解せず。殷勤我を呼んで書師となす。(支韻 涯、奇、師)  
大悲三十二相。書師たる亦一相。

次驥山兄見寄韻

送舊迎新雅集催。揮毫把酒對寒梅。往年豪興無由見。猶有同人高嘯來。

旧を送り新を迎えて雅集催す。毫を揮い酒を把つて寒梅に対す。往年の豪興見るに由無きも。猶同人の高嘯して来る有り。(灰韻 催、梅、來)  
星移り入換つても忘年、迎年の会合は続けて居る。只往年の豪興は見られないが、併し同人連中、中々の元氣だという消息詩。

馳懷千里里山邊。老驥養痾猶未痊。今日飛鴻傳好信。把杯二字不違天。

懷を馳す千里里山の辺。老驥痾を養いて未だ痊えず。今日飛鴻好信を伝う。把杯の二字天に違わず。(先韻 邊、痊、天)  
生酔い本性違わずというが、半癒りだというのに杯を手にするとの便りは喜ばしい。酒仙の酒仙たる所以か。

同對天邊月半環。依稀照到有無間。乘鞍白馬知何處。四十年來夢寐山。

同じく対す天辺の月半環。依稀照して到る有無の間。乘鞍白馬知る何れの処ぞ。四十年来夢寐の山。(刪韻 環、間、山)  
月が鏡であったなら…。

題奔雷蜚龍硯二首

新獲明坑硯。奇紋湛水看。摩挲日三度。人石共

平安。

新獲明坑の硯。奇紋水を堪えて看る。摩挲日に三度。人石共に平安。(寒韻 看、安)  
蜚は飛で飛龍硯と思われる。奇紋は「眼」であろうか。余程の逸品であれば日に三度は撫でて無事を確かめねば安心がならない。

一天飛電閃。滿地石紋奇。雲雨時來過。蛟龍出  
研池。

一天飛電閃めき。滿地石紋奇なり。雲雨時に來り過ぎて。蛟龍研池を出づ。(支韻 奇、池)  
飛龍硯幻想曲をなす。

狂風吹猛雨。霹靂一聲寒。硯背龍蛇潛。雲煙涌  
筆端。

狂風猛雨を吹いて。霹靂一声寒し。硯背龍蛇潛み。雲煙筆端に涌く。(寒韻 寒、端)  
幻想は逐次現実となつて、壁面に躍る大文字となつた。

佛前飲酒

獨坐銜盃繡佛前。長齋不敢學逃禪。迎來五十七  
生日。也對慈顏思少年。

独坐盃を銜む繡仏の前。長齋敢て逃禪を学ばず。迎え來る五十七生日。また慈顔に対して少年を思う。(先韻 前、禪、年)  
ちちのみの父に似たりと人がいいし我が眉の毛も白くなりなき 天田愚庵

論書 顏眞卿

蓋臣兼作墨林雄。百代楷模推魯公。篆意草情三  
稿妙。天姿却勝右軍工。

蓋臣兼ねてなる墨林の雄。百代の楷模魯公を推す。天姿却つて右軍の工に勝る。(東韻 雄、公、工)  
技巧過剰でない天性そのままの顔書、自己の本然の相を表わし得ることこそ技巧の極致であろう。三稿は争坐位、祭姪、祭伯の三稿。

論書 智永

鐵門深鎖謝塵氛。七世再來王右軍。一坐卅年筆  
成塚。赫如真艸二千文。

鐵門深く鎖して塵氛を識す。七世再來王右軍。一坐卅年筆塚を成す。赫如たり真艸二千文。(支韻 氣、軍、文)

一字一字を大切にすればこそ不滅の文字たり得るのである。御手本の字の形を尊重すべきことは勿論、その如何にして成ったかを知ることによって、その功德は無量大となるであろう。樗師曩に真書千字文成り、更に真書千字文の企画ありと承る。鶴立企佇。

庚寅四月初六第二孫出生

懸得桑弧引酒尊。惠風吹滿野人門。老夫閑却詩  
書債。失喜新添第二孫。

桑弧を懸けて得て酒尊を引く。惠風吹き滿つ野人の門。老夫閑却詩書の債。失喜新に添う第二孫。(元韻 尊、門、孫)  
札記に「男子生れて桑弧六、蓬矢六、以て天地四方を射る」とあり、桑の弓を懸けて果子出生を祝うのである。

庚寅八月赴碧南。澄心會諸公爲我設筵于鶴洲樓。席上

口占

流離一別已三春。喜見臨池與年新。佳會今宵談  
舊處。把杯默數欠何人。

流離一別已に三春。喜び見る臨池年とともに新。佳会今宵旧を談ずる処。杯を把つて黙して数う何人を欠くかと。(真韻 春、新、人)

杜甫の九日藍田推氏莊の詩を思わせる。末二句に曰く「明年比会誰か健なるを知らん。酔いて茱萸を把つて仔細に看る。」と。

過静陵

碧南朝去向東回。髣髴知音入夢來。目送孤鴻仰  
雲際。茫然揖我嶽蓮開。

竹雨日。詩境宏豁。思凌太虛。

碧南あしたに去つて東に向つて回る。髣髴として知音夢に入つて来る。孤鴻を目送して雲際を  
仰げば。茫然我を揖して嶽蓮開く。(灰韻 回、來、開)

寝ては夢、起きてはうつつに見る様な間柄を初めて知音というべきか。単純、清浄、崇高。富士山こそ日  
本人一人一人の知音である。静陵は静岡。嶽蓮は富士。孤鴻は孤雁。

## 一休納豆

朝伴茶甌夕酒尊。珍羞聞出自桑門。商量或是禪  
師宜戲。兔糞盛來銀兔盆。

朝に茶瓶に伴い、夕に酒尊(樽に同じ)。珍羞、聞く桑門より出づると。商量す或は是れ禪師の  
戲。兔糞盛り来る銀兔(月の異名)の盆。(元韻 尊、門、盆)

「なつとう」は寺院で造り在家に贈る故、寺納豆とも云う、と瓦礫雑考に記されて居る通り納所僧の豆の  
義と云われている。遠州浜名大福寺で製したものが浜名納豆、京の大徳寺真珠庵のが爰に言う一休納豆。こ  
れ等黒大豆を原料にしたものを「鹹鼓」、白大豆を原料にしたものを「豆黄」と称するのも寺臭い。鹹鼓を  
知らないのが、齋庵宗匠に教えを乞うたところ、名店街で容易に手に入ったのが浜納豆、と大徳寺饅頭。こ  
れは饅頭のテッペンに一休納豆が一粒押しこんである。双方似た納豆故、濱納豆をステンレスの盆にバラマ  
イて見た。兔糞に見える。盆を月とするならば兔が杵について作った丸薬と見る方がこの詩を解する相応し  
かるう。

## 和張志和漁父詞

春水溶溶白鷺飛。溪山經雨綠蘋肥。逃濁世滌塵  
衣。一竿風月詠而歸。

春水溶々として白鷺飛び。溪山雨を経て綠蘋肥えたり。濁世を逃れ塵衣を滌う、一竿の風月、  
詠じて帰る。(支韻 飛、肥、歸)

詠帰して曰く、滄浪の水清まば以て吾が纓を濯う可し、滄浪の水濁らば以て吾が足を濯う可し。(漁父辞)

## 六義園詩會席上次宮澤葦城翁韻

蕭蕭霖雨灑名園。却喜遊人屐不繁。瓢酒三杯吾欲睡。蘋花香裡役詩魂。

肅々たる霖雨名園に灑ぐ。却つて喜ぶ遊人の屐繁からざるを。瓢酒三杯吾れ睡らんと欲す。蘋花香裡詩魂を役す。(元韻 園、繁、魂)

しとしとと降る雨は止もうともしない、名園はおとなう人も稀れである。水草の香る中で一杯一杯復一杯、うつらうつらに詩を考へるともなく……羨むべき謫仙。

### 次西川靖盒兄見寄韻

字字如星斗。奎光耀詞園。吟誦憶往事。光景眼前翻。康衢忽焦土。石佛倚頽垣。兒女傷兇彈。乞治華陀軒。此事向誰語。寄情翰墨尊。剥啄知音至。對坐欲無言。

字々星斗の如く。奎光詞園に輝やく。吟誦往時を憶えば。光景眼前に翻る。康衢忽ち焦土。石佛頽垣に倚る。兒女兇彈に傷き。治を乞う。華陀の軒此の事誰に向かつて話せん。情を寄す翰墨尊。剥啄知音至る。對坐言無からんと欲す。(元韻 園、翻、垣、軒、尊、言) 知己。語り合おうと思つた愚痴も、逢えば無言、側に居るだけで互に慰めになる。カールライルとテニスの様に。

語義 奎光||文章。康衢||繁華街。華陀軒||名医の診療室。剥啄||訪問のノック。

### 上野毛寶山莊詩筵席上次迪堂翁韻

聞是往年田氏莊。芙蓉峰雪撥簾望。戰前風色休多説。劫後未痊詩客腸。

聞く是れ往年田氏の莊。芙蓉峰の雪簾を撥げて望む。戦前の風色多く説くなかれ。劫後未だ痊えず詩客の腸。(陽韻 莊、望、腸)

「田氏」は故田健次郎翁とのこと。戦禍の跡当時猶歴然としてるところへ、斡旋の人しきりに戦前の気色を説明する。多感の詩人聴くに耐えなかつたであろう。

### 鶴仙君分贈芭蕉有詩次韻以謝

牆下芭蕉未展箋。 樗盒蕭索子規天。 一株補得書  
窓綠。 白雨呼醒醉後禪。

牆下の芭蕉未だ箋を展べず。 樗盒蕭索たり子規の天。 一株補い得て書窓綠。 白雨呼び醒ます酔後の禪。(先韻 箋、天、禪)

この作によつて連想されるのは、蚊帳の萌葱染の縁起。 昔、近江商人西川某、江戸と近江の道中、箱根山中、新緑の中の午睡から醒めた時の感覚を、それまで白地であつた蚊帳に染めて売り出したのが大いに当たり、萌葱蚊帳が普及したという話。 それは商才、これは詩魂。 それは錢儲、是は禪定。

蕉根併得薛濤箋。 葉葉他時綠補天。 打坐蒲團閑  
聽雨。 欲參蛙子結跏禪。

蕉根併せ得たり薛濤箋。 葉々他時綠天を補わん。 打坐蒲團、閑に雨を聴き。 參ぜんと欲す蛙子結跏の禪。(先韻 箋、天、禪)

薛濤箋Ⅱ唐代の名妓薛濤、詩を善くす、流落して蜀の浣花溪の水にて十色の詩箋を造る、浣花箋とも薛濤箋とも云う。 是が来歴である。 茲では鶴仙氏の贈つた詩箋を指す。 さて他日天を補う程に生長した芭蕉の広葉に思い深げにあぐらをかく蛙が雨に打たれて居る時は、詩人もその真似して蒲団の上で坐禅してしづかに雨を聴きたいというイメージ。

窓外娛蕉初卷箋。 忽舒潤葉雨餘天。 結跏窺我青  
蛙子。 解否墨林文字禪。

窓外の娛蕉初め箋を卷き。 忽ち潤葉を舒ぶ雨余の天。 結跏我を窺う青蛙子。 解するや否や墨林の文字禪。(失韻 箋、天、禪)

画仙紙を巻いたかと思われる様な芭蕉の若芽が、初夏の一雨を経ると忽ち潤がって、もう其の上には青蛙が至極尤もな悟り顔してわが筆の運びを眺めて坐つて居る。 と云うカリカチュール。

### 和袁隨園銷夏詩

優游上下二千年。 縹帙牙籤高枕眠。 仿漢摹唐醒  
時課。 吟花嘯月醉中天。

### 行路難

行路難。 行路難。 劫餘行路何其難。 康衢忽化爲

焦土。吾廬獨能豈得完。晨夕彷徨瓦礫間。行爲  
傷兒求梁餐。半歲始歸墳墓地。墳道松楸風露寒。  
放浪四年還故處。黃茆結得供衰殘。人心險絶道  
義廢。仰天俯地二發歎。

行路難。行路難。劫余の行路何ぞ其れ難き。康衢忽ち化して焦土と爲る。吾が廬独り能く豈に  
完きを得んや。晨夕彷徨す瓦礫の間。行く行く傷兒の爲めに梁餐を求む。半歳始めて歸る墳墓の  
地。噴道の松楸風露寒し。放浪四年故処に還り。黄茆結び得て衰残に供う。人心險絶道義廢す。  
天を仰ぎ地に俯して三たび歎を發す。(寒韻 難、完、間、餐、寒、殘、歎)

李白はその行路難の最後の二句で、こう歌つて居る。「且つ樂しむ生前一杯の酒、何ぞ須(もち)いん身後  
千載の名」と。「死にほとけより生き佛」と云つてお通夜に飲んだり食つたりする我が国の俗習に似て面白  
い。同じ行路難でも白樂天は違ふ。矢張り最後の二句で、「行路難、水に在らず、山に在らず。只だ人情反  
覆の間に在り。」と歎いて居る。古歌に「世の中を渡りくらべて今ぞ知る阿波の鳴戸に波風もなし」とある。  
世渡りのむづかしさにくらぶれば波風の逆巻く鳴戸でも物の数ではないと言つたのである。

樗詩のこの行路難は戦後の世渡りの一層の難儀を歎かれた古詩。

むづかしい、むづかしい。戦後の世渡りの何とむづかしいことか、繁華衛も忽ち焼け土と変り果てたのだ  
つた、どうして自分の家だけが満足に残ることができたであろうか。朝夕に焼け瓦や石ころの上をさまよつ  
たのも、傷ついた子供の食糧を求めるためであつた。そのようなみぢめな半年を過(こ)し、傷痕の癒えるのを  
待つて故郷に帰つたのであるが、墓參道の松風やひさ木の露も亦寒かつた。それから四年間浮草のように処  
さだめず方々を渡り歩いてやつと東京の元の土地に帰り着き、小屋を建てて老後に供えることができたが、  
人の心は険しくて、義理人情はすたれ果てた。天を仰ぎ、地に伏して、ああ世渡りはむづかしいと歎声を發  
したことであると。この「人心險絶道義廢」の一句が白樂天の「只在人情反覆間」と等しく、この長詩の眼  
目と筆者は思ふのである。

## 題小著書道入門

期爲童蒙示指鍼。眇然小冊豈求深。唯憂戦後輕  
桃極。耿耿臨池一片心。

竹雨曰。小題大做。深入無淺語。

童蒙の爲めに指鍼を示さんと期す。眇然たる小冊豈に深さを求めんや。唯憂う戦後輕桃極まる  
を。耿耿たり臨池一片の心。(侵韻 鍼、深、心)

自著「書道入門」に題された詩。

子供たちの爲めの道しるべだけで、この小さな本に書道の深奥をなどと期待をかけた訳では勿論ない。只  
だ戦後の世にはびこつた、いかがわしい傾向が氣になつて、ゆらいだ書道上の一ひらの心もちからである。  
と題された。書道入門、私共にとってはこれさえあれば千人力。されば竹雨先生も小と題して大となす。深

入に浅語無しと評されている。

## 輓黒木拜石兄

墨海風濤漭不分。巨星忽墜黯愁雲。遺翰堪比換  
鶯帖。卓犖昭和王右軍。

墨海の風濤漭として分たず。巨星忽ち墜ちて愁雲黯たり。遺翰比するに堪えたり換鶯の帖。卓犖たり昭和の王右軍。(文韻 分、雲、軍)

書の海の波風荒らく、名手忽ち没して目の前が暗くなった思いである。のこされた立派な作品は王羲之の筆蹟とくらべてもよい位で昭和の王右軍と云つてもはぶかしくない人であったが。と益友を失われたことを惜しまれた哀切の作。

序に、換鶯帖の由来を晋書王羲之伝から。羲之、性、鶯を愛す。山陰に一道士有り。好んで鶯を養う。羲之、往きて観る。意甚だ悦ぶ、因つて之を売らんことを求む。道士云う、爲めに道德経を写せ、まさに群を挙げて相贈るべきのみと。羲之欣然として写しおわり、鶯を籠にして帰り、甚だ以て楽しみとなす、其の任率(天性)此の如し。と。

## 庚寅嘉平月筆友會席上次翠石翁韻

白頭相會誼何敦。乘興畫成添竹孫。醉墨誰能辨蘆  
葉。歛然一笑幼心存。

白頭相会す誼何ぞ敦き。興に乗じ、画成つて竹孫を添う。醉墨誰れか能く蘆葉を弁ぜんや。歛然一笑幼心存す。(元韻 敦、孫、存)

かのえとらの年十二月、筆友会の席上で、高畑翠石翁の詩の韻、敦、孫、存を使って出来た詩である。お互に白髪頭になってしまいましたでしたが随分長いおつきあいですねなどと盃を交しつつ、竹の画ができた、竹の子まで描き添えてあるから誰も蘆の葉と間違えるようなことはあるまいが……はははと笑ってしまった。笑顔は互に童顔である。

## 庚寅歳抄寄驥山老契

墨友三千翰來。臨池閑事一忙哉。窮陰忽念山  
中客。七十明朝舉壽杯。

墨友三千翰を寄せて来る。臨池の閑事一に忙なるかな。窮陰忽ち念う山中の客。七十明朝寿杯を挙げん。(灰韻 來、哉、杯)

昭和二十五の年の瀬に川村驥山老友に上げられた作。書海誌友からの競書が当時已に月々三千通に上ったことが解る。それを区別、審査、評、掲載と、忙しい。書は閑事といひ乍ら忙しい。が、一服、くつろぐと、信濃の山の驥山老が恋しくなる。明日は元日だ、七十の賀の杯をにこにこ挙げられる老驥山の影が見えるよ  
うだ。

## 守歳聞鐘

漂泊多年不定蹤。知恩朝去夕金龍。如今守歳電  
波裡。坐聽東西夜鐘。

漂泊多年蹤を定めず。知恩朝に去つて夕に金龍。如今守歳電波の裡。坐して聴く東西除夜の鐘。  
(冬韻 蹤、龍、鐘)

除夜の夜、土庶の家、炉を囲み団坐して、旦(あした)に達するまで寝ねず、之を守歳と謂う。と東京夢華録にある。詩人は戦後四年間、杜甫の様に各地を漂泊された。それは朝(あした)に京都の智恩院の明けの鐘を聞き暮れには東都の金龍山浅草寺の鐘を聞くというほど、処さだぬあわたしきであつたが、今は大晦日の夜明かしに、ひとりラジオの前に坐し、東西二京の除夜の鐘をいながらに聞く……。感慨深いことである。

## 辛卯新年 昭和二十六年

四十餘年遊墨林。平生牢落少知音。臨池往往嘆  
風樹。試筆今朝聊會心。

四十余年墨林に遊ぶ。平生牢落知音少れなり。臨池往々風樹を嘆ず。試筆今朝聊か会心。(侵韻  
林、音、心)

辛卯(かのとう)昭和二十六年の正月、指折り数えれば筆研に命を托すること四十年、戦後は心を許す友の音なうことも少くてさびしい。が、筆研を専ら友とすれば時には亡き両親に見て貰いたいと思う程善く書けることもある。元旦の今朝とて会心の作……。仏前に供せられたことであろう。

因みに、風樹の嘆というのは、韓詩外伝に「夫れ樹、静かならんと欲するも風止まず、子、養わんと欲するも親待たず、往きて返えすべからざる者は年なり、逝きて追うべからざるものは親なり。」とあるにより、父母已に死して孝養をつくすこと能はざるをなげく義である。

## 辛卯新春偶成

半過世紀歳華新。歐俗米風辛卯春。陋巷猶餘顏  
氏樂。紙田耕罷一瓢親。

半ば世紀を過ぎて歳華新たなり。欧俗米風辛卯の春。陋巷猶余す顔氏の樂。紙田耕し罷んで一瓢親しむ。(眞韻 新、春、親)

かのとう年の初春にたまたま出来た詩。

昭和二十六年は一九五一で二十世紀の後半に入った。クリスマスだ、靴下だ、ハッピーニューイヤーだ、レディファストだ、何だかこんだと街は欧米化していくが、ドツコイ斯れ是の陋室、惟だ吾が徳馨しと云つて顔回と同じ様に勉強して一簞の食、一瓢の飯を楽しむ詩人のあることは知らないだらう。

## 辛卯元旦口占

劫餘争效米歐颯。薄俗紛紛欲失眞。筆硯休言是  
閑事。個中留在國風淳。

劫余争いて效う米欧の颯。薄俗紛紛として眞を失わんと欲す。筆硯言うなかれ是れ閑事と。個中留めて在り国風の淳。(眞韻 颯、眞、淳)

かのとう年元旦の口占という口占さみ。戦後われもわれも、アメリカはこうだフランスはどうだと真似する。真似だからほんとのことは解らない、上べだけの薄いメッキ。こう云う手合に云わせると、筆なんかマドロッコしくてなどというであらうが、その中にこそ我が国の淳風美俗があるのではないか。

故事附記、颯に效(なら)う。昔、西施という美人が胸の痛みのために顔をしかめたら一層良い女に見えた。これを見てその里の醜婦も真似をして颯めたので、里人が驚いて逃げ去ってしまったと云う故事に基づき、是非善悪を考えず強いて他のまねをするをいふ。

## 宸題朝空

海霞紅射日升邊。忽見錦波千里連。島影漸明鷗  
亂舞。瑠璃一碧鑑長天。

海霞の紅は射す日升の辺。忽ち見る錦波千里連る。島影漸く明らかに鷗乱れ舞う。瑠璃一碧長天を鑑る。(先韻 邊、連、天)

天皇が御提出になられた新年御歌会の題を宸題という。つまり勅題「朝空」

初日が昇りそめたらしく東の空が紅になった、と見る間にサツと海上に金波が足許まで光つて来て島々がはつきりして青空に鷗の群れ飛ぶのがのどかに、めでたいと仰せらるる詩人は、瀬戸内の島で誕生された由、題詠でも真に迫る。

## 辛卯一月詩會席上分韻得灰

璞社詩筵侍幾回。每隨驥尾撚髭來。才疎未有驚

# 人句。酒數又重金谷杯。

璞社の詩筵侍すること幾回ぞ。毎に驥尾に随つて髭を撚つて来る。才疎にして未だ人を驚かすの句有らず。酒數又重ぬ金谷の杯。(灰韻 回、來、杯)

引いた織を開いたら「灰」と書いてある、その灰の韻で一首作らねばならない、これを分韻という。さて璞社(土屋竹雨先生主宰の詩社)の詩会に多年連なっているが、いつでも人の尻について詩句を案じて呻吟する。才力がなく、未だに人を驚かすような名吟ができない。そこでまたしても罰杯の酒を重ねた。借間す飲むためにわざと名吟をお出しにならないではありませんか。

附記 ①駿尾に随う〓千里の馬の尻に止つて居る蠅は馬が千里走れば千里飛んだ結果になるので人の尻馬に乗ることをこういう。

②金谷の杯〓李白の桃李園の序に、「如し詩成らずんば罰は金谷の酒數に依らん」とある。昔、晋の石崇が金谷園で、詩を作り得ない者に罰酒三盃づつ飲ました例に依ろうというのである。

辛卯三月列西行上人歌碑除幕式于大磯鳴立庵

一路湘南艸烟欲。歌碑新勒古庵前。西公千載遺芳躅。幽韻長締文字縁。

注。鳴立庵者。距今二百六十年前。西行五百年忌辰。大淀三千風所創建。

庵主奕世爲俳句宗匠。第十八世庵主鈴木芳如女史。新勒鳴立澤歌碑。屬余書其碑陰。

一路湘南艸烟らんと欲す。歌碑新に勒す古庵の前。西公千載芳躅を遺し。幽韻長く締ぶ文字の縁。(先韻 烟、前、縁)

三月だから湘南はもう草が烟るように萌えたっている。古庵の前には歌碑が新らしくきざまれた。西行様の芳躅(善行の跡)は千年後の今も伝わっている。その幽韻(立派な歌)と文字の縁によって結ばれることである。

西行は有名な歌人である。三夕歌の一として。「心なき身にもあはれはしられけり鳴(シギ)たつ沢の秋の夕暮」西行。他の二首は「見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮」定家。「さびしさはその色としもなかりけり槇たつ山の秋の夕暮」寂蓮。である。

詩人の自注・鳴立庵は、今を距る二百六十年前、西行の五百年忌辰に、大淀三千風の創建せし所なり。庵主奕世(代々)俳句の宗匠たり。第十八世の庵主鈴木芳如女史新たに鳴立沢の歌碑を勒し、余に其の碑陰(碑の裏面)を書することを囑す。(頼まれた)

## 梅花絶句

黄昏尋句石谿隈。山角忽懸明月來。夾水野梅三百樹。滿衣花影濁徘徊。

黄昏句を尋ぬ石谿の隈。山角忽ち明月を懸けて来る。水を夾んで野梅三百樹。滿衣の花影独り徘徊す。(灰韻 隈、來、徊)

絶句とは四句からなる詩で、五言四句を五言絶句、七言四句を七言絶句。略して五絶、七絶といふことがある。

たそがれに石の多い溪谷のあたりを散策して居ると突如として月が山の端に懸り、一目三百本の野梅が小川を夾んで、はつきりと見える。その花の影を我が衣いっばいに映しながら去りもやらず花の下を徘徊した。

### 謝子青兄見贈彩箋

故人裁贈彩霞箋。紅似櫻雲青艸氈。料峭春寒風雪夕。韶光乍落几邊妍。

故人裁して贈る彩霞の箋。紅は桜雲に似、青は草氈。料峭春寒風雪の夕。韶光乍ち几辺に落ちて妍なり。(先韻 箋、氈、妍)

友人がきちんと裁った霞の彩色をした詩箋を贈って下さった。紅色のは桜にまがう雲のようだし、青いは毛氈を敷いたような若草の色。春もまだ浅くて雪でもちらつく夕、この様な春の美しい色が机のあたりを飾って呉れてなまめかしく嬉しいことある。

### 遊于湯磧

嫩綠參差彩四山。晚櫻點綴翠微間。幽禽聲和石溪響。晞髮倚欄心自閑。

嫩綠參差として四山を彩る。晚桜点綴す翠微の間。幽禽の声は和す石溪の響。髪を晞して欄に倚れば心自ら閑。(刪韻 山、間、閑)

若緑が濃淡さまざまに山々をいろどり、おそ桜がそれを綴るように山の中腹あたりに咲いて居る。春鳥は岩間の流れの音に和してさえづつて居る。頭髪を春光さらして欄干に倚ったら心が自らの一んびりして来た。

### 送笠井南邨兄歸故山

無復畸人比謫仙。詩壇酒社兩寥然。甲山墨水豈

# 云遠。來往時時投巨篇。

復た畸人の謫仙に比する無し。詩壇酒社兩つながら寥然。甲山墨水豈に遠しと云わんや。來往時々時巨篇を投ぜよ。(先韻 仙、然、篇)

復たに意味がある、君を措いてはである。外に李白にくらべるような脱俗の人がないので、詩酒の会がまことにさびしい。甲斐の山々と墨田の流れはさまで遠くない。どうか時々來往して立派な詩を見せて下さいよ。

講仙Ⅱ天上界から人間界にながされた仙人という意で、李白をほめていう。李白伝に、「賀知章其(李白)の文を見て歎じて曰く子は謫仙人也」とある。

## 次南邨兄見寄韻却寄

遙寄山中怡悅辭。襟懷閑逸字還奇。誦來坐覺白雲氣。懷聘高人弘景詩。

竹雨曰。白雲恰悅。靜者所爲。人臻此境。則可謂達道。兩家唱酬。各會其意。不翅措詞。足爲妙也。

遙かに寄せられる山中恰悅の辭。襟懷閑逸、字もまた奇。誦し來つて坐ろに覺ゆ白雲の氣。懷は聘す高人弘景の詩。(支韻 辭、奇、詩)

はるばる山中のよるこびのことは寄せられてうれしい。胸のおもいも、書かれた文字もまことに面白い。口ずさむとそぞろに白雲の氣が迫つて、彼の山中の宰相と言われた陶弘景の詩が思い出される。

高人弘景の詩Ⅱ齊の高帝嘗て問う、山中何の有る所ぞと、陶弘景詩を以て対えて曰く、「山中何の有る所ぞ。嶺上白雲多し。只自ら怡悅すべし。持して君に贈るに堪へず」と、

尚この賡酬につき竹雨先生評して曰く「白雲の恰悅は靜者の爲す所、人この境に至れば則ち道に達せりと云ふべし。兩家の唱酬、各々其意に会す。ただに措詞にとどまらず。妙となすに足る。」と。

## 南邨兄需余書即添疊韻一詩以贈

醉餘驅筆寫蕪辭。心氣安舒字稍奇。造句平生慚拙速。任地博笑未敲詩。

醉余筆を驅つて蕪辭を写す。心氣安舒、字稍奇なり。造句平生拙速を慚ぶ。さもあらばあれ笑を博す未敲の詩。(支韻 辭、奇、詩)

疊韻とは、原詩の韻を用いたのが次韻で更らにその韻を重ねて用いたのを云う、前詩とこの詩の関係がそうである。

酔ったまぎれでつもらんことを書いたが、氣持がゆったりしたせいか字は少々面白く出來た。拙くても急

いで句を作る癖があつてはづかしいが、それはとにかくとして、まだ充分推敲してない詩を御笑覧に供する。  
というのがこの詩であらう。

## 観源氏物語劇

源語始登歌舞臺。光芒千載紫姬才。宛看祕閣舊  
圖卷。絢爛豪華驚目來。

竹雨曰。源語初入劇。曲盡意態之妙。九原之下。紫姬有知。則應嫣然破  
顔也。

源語始めて登る歌舞の台。光芒千載紫姬の才。宛ら看る秘閣の旧図卷。絢爛豪華目を驚かして  
来る。(仄韻 臺、才、來)

源氏物語が初めて歌舞伎の舞台に登されたが、千年来光る源氏と共に輝きを放つて居る紫式部の才筆によ  
るこの劇は、あたかも奥深い御殿の中に年古く大事に蔵せられて来た絵巻物を繰り広げて見るようで、その  
立派なことまことにけんらんとして豪華、目を驚ろかすばかりであるという感激。

## 次南甫君見似韻

偶迎詞友雨餘天。一刻清談日似年。緇服羨君閑  
富貴。出門自在學詩仙。

偶ま詞友迎う雨余の天。一刻の清談日年に似たり。緇服羨む君が閑富貴。出門自在詩仙を学ぶ。

(先韻 天、年、仙)

雨上りの上天気、思いがけなく詩友が見えた。話に興が乗つて春日遅々。さて僧衣の君が閑暇に富み、自  
由に出歩くことのできる詩仙ぶりが羨ましい。

## 輓田中白邨君

縦横健筆捲風塵。訃至惘然傷我神。平昔交情淡  
如水。狂瀾墨海有爲人。

縦横健筆風塵を捲く。訃至つて惘然我が神を傷ましむ。平昔交情淡水の如し。狂瀾の墨海有爲  
の人。(眞韻 塵、神、人)

健筆を縦横自在に書きまくつて居られた君の死亡通知を受けて惘然として心を傷めた。昔から淡々として

君子の交りを続けて来たのであったのに……。それに目下テンヤワンヤの書道界、この中であってきつと何かやるなど期待して居たのだが、あゝ。

### 次韵以賀驥山老兄受藝術院賞

夙尋仙迹入名山。日見白雲過行關。藝苑推譽何攪意。古稀醉佛有餘閑。

竹雨曰。醉佛尊者讀此詩。應破顏一番。呵呵大笑也。

夙に仙迹を尋ねて名山に入る。日に見る白雲の行關を過ぐるを。芸苑の推譽何ぞ意をみださん。古稀醉仏余閑あり。(刪韻 山、關、閑)

夙に名山に入つて仙人の生活に入り、日日竹関を過ぎる出雲と遊んで居る先生のことだ。院賞なんかで禅定を乱されるようなことはよもあるまい。古稀を迎えた醉仏先生にはそうした余裕綽々たるものがある筈だ。竹雨先生評して曰く、醉仏尊者この詩を読まば応に破顔一番呵呵大笑すべしと。

ここでソツと、醉佛尊者なるニツクネームの由来を申上げる。驥山先生生来酒を好む。お若い頃は相当にイケたらしく、飲む程に酔う程に興昂まり、御機嫌をとり結んで居ると酔興益々甚だしくなつて殆ど持て余す。対手にならぬが却つて無事。そこで「酔うたらホットケ、」これが酔仏の二字の出処。

### 次白香山北院韻

爲客南都住。浮圖地自偏。鳥啼深樹裡。泉迸曲房前。翠静山中樂。忘機物外縁。劫餘飄蕩久。始得一閑眠。

客と爲つて南都に住す。浮図、地自ら偏す。鳥は啼く深樹のうち。泉はほとばしる曲房の前。翠静山中の樂。忘機物外の縁。劫余飄蕩久しく。始めて得たり一閑眠。(先韻 偏、前、縁、眠)

白香山は唐の白樂天。さて故郷を離れて南都―奈良に住みついた。仮り住いの浮図―寺塔であるがここには帯解寺―は辺鄙なので樹木が深く鳥が盛に啼く、泉もほとばしり湧いて折れ曲つた庫裏の前を流れて居る。静寂が習わしとなつて山中に居る楽しみ、世のからくりも忘れ、物欲を離れての仏縁を得て戦後長く続いたさすらいが、ここに初めてこの様な安眠を得ることができたのであった。と詩人は述懐された。

### 觀門野重九郎大人書次其詩韻

不接温容已幾霜。干戈控僣恨何長。無端今見大

# 人筆。憶騁當年親侍傍。

温容に接せざること已に幾霜。干戈倥傯恨み何ぞ長き。端なくも今見る大人の筆。憶は騁す當年親しく傍らに侍せしに。

随分長年お目にかかれませんでした。これも戦争のさせたわざで恨めしいことでもあります。今偶然翁の書を発見して、幾昔前に翁の側で一しよに仕事をしたことが思い出されます。と、久濶を相語る様に序せられた作である。誠に文は人也。

## 辛卯七月觀早實對明治高校野球戰

一打一投攻防闌。危機來去幾波瀾。戛然飛響炎天下。決勝殊勲鳳夢鸞。

一打一投、攻防闌なり。危機來去、幾波瀾。戛然たる飛響、炎天のもと。決勝の殊勲ホームラ  
ン。(寒韻 闌、瀾、鸞)

投げました。打ちました。ピンチ<sup>三</sup> あ<sup>三</sup>球は高い。ホームラン・ホームラン・ゲームセット<sup>三</sup> 宛然実況  
放送である。

## 宮尾荷亭翁十年祭

烏飛兔走十星霜。不及世情遷轉忙。戰後風潮翁若識。大聲叱咤罵輕狂。

竹雨曰。結七字。描出荷亭老氣概。無復餘蘊。

烏飛兔走十星霜。及ばず世情遷轉の忙がしきには。戦後の風潮翁若し識らば。大声叱咤罵軽  
狂をののしらん。(陽韻 霜、忙、狂)

烏は太陽の異名である。金鴉とも金鳥をもう。太陽の中に三足の鳥が居るといふ伝説に基づく。兔は月の異名である。月の中に兔が居るといふ伝説に基づく。玉兔ともいう。韓琮の詩に「金烏長飛玉兔走」とあって、烏飛兔走、月、日の立つのは早いもので、翁の歿後もう十年の星霜―歳星は一年に天を一周し、霜は年毎に降る。転じてとしつきの義、従つて十里霜即ち十年―を経てしまったことである。年月も早い、世態人情の移り変りのテンポの早いこと！ とりわけいやな風潮はとどまるところを知らない。草葉の陰で翁も、そのさまはなんだ<sup>三</sup> と軽はづみに狂い廻つて居る連中を叱つて居ることであろう。此声は詩人の声でもある。

竹雨先生この詩を許して曰く「結七字、荷亭老の氣概を描き出して復た余蘊無し」と。

## 月下有感

觀月鮫洲又柳橋。華筵豪客舉杯邀。寒齋兀坐聽  
蟲語。後二十年三五宵。

月を観る鮫洲又柳橋。華筵の豪客杯を挙げて邀う。寒齋に兀坐して虫語を聞く。後二十年三五の宵。(蕭韻 橋、邀、宵)

筆者の秘笈本に「觀月集」がある。昭和三年に漱雲先生―芳翠先生の別号―が細楷を以て全文を写された立派な作品である。それに依ると昭和丁卯(一九二六)十月八日の夕鮫洲川崎亭で、同十月十日夕柳橋深川亭で、当時の富豪大倉喜七郎男の催しで天下の詩人が月見をされたこと、その詩作品と共に詳細が録されている。その鮫洲や、柳橋の豪華な宴席で、天下の詩豪と共に杯を挙げつつ見た、あの明月、月に変りはないけれど。二十年後の三五(十五夜)の月は、鳴く虫と我とだけで、寂しくこの書齋で眺めることである。との詩人の感慨。